

1. 本論の目的

ロマンス諸語、英語、ドイツ語、ロシア語などは、名詞を修飾する語句が名詞に先行するか後行するか、修飾句自体が主要部先行か後行か、修飾語句あるいは節が外置によって名詞から離れることができるか、などの点において異なる (cf. Escribano 2004, Cinque 2010)。ここでは修飾部として、語、複合語、句複合語、分詞句、冠飾句、関係節などを含めて考察する。発表ではまず、名詞とその修飾語句（あるいは節）が同じ韻律句 (prosodic phrase) に入る、という音韻部門の制約を作業仮説として提案する。次に、その制約が名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないことを観察し、それが外置の可能性の違いを生じること述べる。最後に、韻律句の制約が、主要部名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないのはなぜか、また各言語で名詞と修飾部の語順が異なるのはなぜかについて、音韻論と統語論およびインターフェースの点から考察する*。

2. 名詞修飾の音韻制約

この節では、名詞とその修飾語句（あるいは節）が同じ韻律句 (prosodic phrase) に入る、という音韻部門の制約を作業仮説として提案する。まず、名詞の前に置かれる修飾語句は、言語によって、長さ、構造の複雑さ、語順が制限されている。英語とドイツ語の例をあげる。

- (1) a. the [playing] child
 b. * the [playing [in the garden]] child
 c. * the [[in the garden] playing] child
 d. the child [playing [in the garden]]
 e. * the child [[in the garden] playing]
- (2) a. *das [spielende] Kind*
 the playing child
 b. * *das [spielende [in dem Garten]] Kind*
 the playing in the garden child
 c. *das [[in dem Garten] spielende] Kind*
 the in the garden playing child
 d. * *das Kind [spielende [in dem Garten]]*
 the child playing in the garden

* 本研究は JSPS 科研費 15H03213, 16H03427 の助成を受けたものである。

e. * *das Kind* [[*in dem Garten*] *spielende*]

the child in the garden playing

英語とドイツ語では分詞の修飾語は (1a) のように前置されるが、前置詞句を含む分詞句は 英語では (1d) のように後置されなければならない。しかし、ドイツ語では (2b) のように前置詞句が分詞に先行する語順で名詞主要部に前置されなければならない。これらの例の文法性を説明するために、次のような隣接性条件を仮定することが考えられる。

(3) 修飾句の主要部は被修飾名詞に隣接していなければならない。

実際、Haider (2010: 194) は、edge-effect という制約を提案している (cf. Haider 2013: 207)。

(4) The head of the phrase adjoined to a head-initial phrase must be adjacent to the target phrase.

Haider の論に従えば、(1b) と (2b) は、本来は主要部先行型である名詞に前置詞句が付加されていて、その主要部が名詞句に隣接していないため、(4) の制約によって排除されることになる (cf. Hawkins 1994)。しかし、ミニマリストの考え方では、統語論では Merge によって階層構造のみが構築され、線形順序はインターフェイスで決定されるため、主要部の隣接性条件を統語論に課することはできない。そこで、本論ではまず作業仮説として次の音韻的な制約を提案する。

(5) 名詞とその修飾語句（あるいは節）は同じ韻律句 (prosodic phrase) 内になければならない。

(1b) と (2b) の分詞句は主要部先行の語順であるため、音韻的境界 (/) がその右に生じると考えられる。これは、主要部先行の構造では角括弧で示されるような統語境界がその右端に多く生じ、それが音韻境界と解釈されるためと考える (Selkirk 1986, Tokizaki 1999, 2008, Ackema and Neeleman 2004, Wagner 2005 を参照)。

(6) a. * the [playing [in the garden]] / child (= (1b))

b. * *das* [*spielende* [*in dem Garten*]] / *Kind* (= (2b))

the playing in the garden child

このように音韻的境界が修飾部と被修飾名詞の間に介在するため、(1b) と (2b) は音韻制約 (5) によって排除される。これに対し、(2c) の分詞句は主要部後行の語順であり、統語境界をその右端よりも左端に多く持つため、音韻的境界 (/) をその左に生じても、その右、すなわち被修飾語との間には生じない。

(7) *das* / [[*in dem Garten*] *spielende*] *Kind* (= (2c))

the in the garden playing child

そのため、(5) の制約に違反せず、容認される。また、(1c) は、英語の分詞句が主要部後行の語順をとらないために容認されないと考えられるが、この主要部パラメータによって扱われてきた語順も音韻的な制約に還元されるべきだと考える (Tokizaki (2011), Tokizaki and Kuwana (2013) を参照)。

3. 名詞修飾の語順と音韻制約

この節では、(5) の制約が名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも

適用しないことを観察し、それが外置の可能性の違いを生じることを述べる。一見、制約 (5) は被修飾名詞に後行する修飾部にも適用するように見える。ドイツ語の (2e) における分詞句は、主要部後行であるため、その左に音韻境界を生じ、制約 (5) に違反するからである。

- (8) * *das Kind* / [[*in dem Garten*] *spielende*] (= (2e))

the child in the garden playing

しかし、関係節は、英語でもドイツ語でも、修飾する名詞との間に音韻境界を持つのが一般的である。

- (9) a. I love the child / [who is playing in the garden]

- b. *Ich liebe das Kind* / [*das in dem Garten spielt*]

I love the child who in the garden plays

(5) の制約は、2 節で見たように名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないことになる。Multiple Spell-Out の枠組みでは、関係節 (CP) は音韻的に自立した単位すなわち *phase* として音韻部門に送られると考えられるので (cf. Inaba 2009)、関係節がその前に音韻境界を生じるのは、統語分析から予測されるところであるが (Dobashi 2003)、修飾関係が何によって保障されるのかは検討しなければならない。

(5) の制約が修飾部後行構造に適用しないとするなら、関係節が外置可能であることが説明される。

- (10) a. Something [that caused concern] / came up

- b. Something came up / [that caused concern]

- (11) a. *Etwas, das Besorgnis erregte, passierte.*

something which concern aroused happened

- b. *Etwas passierte, das Besorgnis erregte.*

something happened which concern aroused

(10b), (11b) では、関係節とそれが修飾する名詞が音韻境界で隔てられているが文法的である。ここで、修飾部が名詞に先行する語順は、(5) の制約によって正しく排除される。

- (12) a. * [that [caused concern]] / something came up

- b. * [das [Besorgnis erregte]] / etwas passierte.

4. なぜ名詞修飾の音韻制約は修飾部後行構造には適用しないのか

この節では、韻律句の制約が、主要部名詞に先行する修飾語には適用するが、後行する修飾語には必ずしも適用しないのはなぜか、また各言語で名詞と修飾部の語順が異なるのはなぜかについて、音韻論と統語論およびインターフェースの点から考察する。

2 節で仮定した音韻制約は、純粹に音韻論の要請でないという問題を持っている。なぜ修飾部と被修飾語は同じ音韻領域になくてもならないのか、それは音韻論が決めるものではない。意味解釈が同一フェイズ内での修飾関係を要請していると考えられる。この制約をもう一つの仮説として示

す。

(13) 名詞とその修飾語句（あるいは節）は同じフェイズ内になければならない。

ここでは、Spell-Out は音韻と意味の両部門に同時に起こると仮定する（Chomsky 2001）。関係節とそれが修飾する語句の場合は、関係詞が、1つのフェイズとなる関係節内で主語や目的語、付加詞などの文法的機能を果たしている。そして、被修飾語との同一性をその形態（の一致）などによって、異なるフェイズを超えて示している。よって (10) の制約を間接的に満たしていると考えられる。

では、分詞句が名詞に後置される構造はどうか。

(14) a. That man [cleaning the table] / has a nice shirt.

b. * That man has a nice shirt / [cleaning the table]. (Emonds 1985: 94)

(15) a. *weil ich das [im Garten spielende] Kind liebe*

because I the in-the garden playing child love

b. * *weil ich das Kind liebe [im Garten spielende]*

because I the child love in-the garden playing

ここでは(11b), (12b)に示すように外置が許されない。また、形容詞も同様である。

(16) a. A [blond-haired] man / came into the room.

b. * A man came into the room / [blond-haired].

(17) a. *Ein [blondhaariger] Mann kam ins Zimmer.*

a blond-haired man came into-the room

b. * *Ein Mann kam ins Zimmer [blondhaariger]*

分詞句と形容詞が外置できないのは、関係節とは異なり、同一指示の要素を含まないので (13) の制約に違反するためと考えられる。しかし、ここで問題となるのは前置詞句の外置である。

(18) a. A man [with blond hair] / came into the room.

b. A man came into the room / [with blond hair].

(19) a. ... *dass eine Frau [mit blauen Augen] den Raum betreten hat*

that a woman with blue eyes the room entered has

‘that a woman with blue eyes entered the room’

b. *dass eine Frau den Raum betreten hat [mit blauen Augen]* (Müller 1995: 216)

前置詞句は、分詞句や形容詞と同じく同一指示の要素を含まないが、外置が可能である¹。よって、外置される前置詞句は、関係節とは異なる方法で認可されていると考えられるが、この問題はさらに検討する必要がある。

¹ ただし、前置詞句の外置は出現などを表す動詞以外では容認可能性が下がる。

(i) a. A man [with blond hair] / disappeared.

b. * A man disappeared / [with blond hair].

5. 結論と展望

本論では、名詞修飾の語順は、修飾部と被修飾語の間に音韻境界がないという制約を守るように決定されることを論じた。これにより、修飾句（節）と被修飾語の主要部が隣接しなければならないという隣接条件を設定する必要がなくなる。これは、語順は統語論には存在せず、音韻とのインタフェースで決定されるというミニマリストの考えに沿うものである。

本稿では、ゲルマン系の英語とドイツ語しか扱うことができなかった。フランス語などのロマンス系諸語やロシア語などのスラブ系諸語、日本語など、他の言語の語順も多様である。例えば、ロシア語などのスラブ語では、主要部先行の修飾句が名詞に先行することができる (cf. Grosu and Horvath 2006)。

- (20) a. [polnaja solnca] komnata
full sun.GEN room
'a room full of sunlight' (Babby 1975: (1.5))
b. [gotovyj na vse] student
ready on everything student
'a student ready for anything' (Babby 1975: (1.6))

これは、音韻的な制約 (5), (10) に違反するようと思われるが、容認される。これはスラブ語が冠詞を持たないこと、左枝条件を持たないことと関連するのであろうか (cf. Bošković 2008)。

また、英語やドイツ語でも、句複合語では、同様の構造と語順が容認される。

- (21) a. [over-the-fence] gossip
b. der ['Fit-statt-fett]-Bürowettbewerb
the fit-over-fat office-contest
'the fit-over-fat office contest' (Wiese 1996)

これらの例では、複合語化することにより、音韻境界を生じにくくなっていることが容認性を高めているように思われるが、今後、考察範囲を広げて妥当な分析を求めて行きたい。

参考文献

- Ackema, Peter and Ad Neeleman (2004) *Beyond morphology: Interface conditions on word formation*. Oxford: Oxford University Press.
Babby, Leonard Harvey (1975) *A transformational grammar of Russian adjectives*. The Hague: De Gruyter Mouton.
Bošković, Željko (2008) What will you have, DP or NP? *NELS* 37: 101–114.
Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*. 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.
Cinque, Guglielmo (2010) *The syntax of adjectives*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Dobashi, Yoshihito (2003) Phonological phrasing and syntactic derivation. Unpublished doctoral dissertation, Cornell University.
- Emonds, Joseph, E. (1985) *A unified theory of syntactic categories*. Dordrecht: Foris.
- Escribano, José Luis González (2004) Head-final effects and the nature of modification. *Journal of Linguistics* 40: 1–43.
- Grosu, Alexander and Julia Horvath (2006) Reply to Bhatt and Pancheva's "Late merger of degree clauses": The irrelevance of (non-)conservativity. *Linguistic Inquiry* 37: 457–483.
- Haider, Hubert (2010) *The syntax of German*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haider, Hubert (2013) *Symmetry breaking in syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hawkins, John A. (1994) *A performance theory of order and constituency*. Cambridge: Cambridge University Press
- Inaba, Jiro (2009) Toward a phase-based analysis of post-verbal sentential complements in German. In: K. Grohmann (ed.) *InterPhases: Phase-Theoretic Investigations of Linguistic Interfaces*, 263–282. Oxford: Oxford University Press.
- Müller, Gereon (1995) On extraposition & successive cyclicity. In: Uli Lutz and Jürgen Pafel (eds.) *On extraction and extraposition in German*. Amsterdam: John Benjamins. 213–243.
- Selkirk, Elisabeth (1986) On derived domains in sentence phonology. *Phonology Yearbook* 3: 371–405.
- Tokizaki, Hisao (1999) Prosodic phrasing and bare phrase structure. *NELS* 29, 381–395.
- Tokizaki, Hisao (2008) *Syntactic structure and silence: A minimalist theory of syntax-phonology interface*. Tokyo: Hituji syobo.
- Tokizaki, Hisao (2011) The nature of linear information in the morphosyntax-PF interface. *English Linguistics* 28: 227–257.
- Tokizaki and Kuwana (2013) A stress-based theory of disharmonic word orders. Theresa Biberauer and Michelle Sheehan (eds.) *Theoretical approaches to disharmonic word orders*, 190–215. Oxford University Press.
- Wagner, Michael (2005) Asymmetries in prosodic domain formation. *MIT Working Papers in Linguistics* 49: 329–367.
- Wiese, Richard (1997) Phrasal compounds and the theory of word syntax. *Linguistic Inquiry* 27: 183–193.